



エイリアンえっち —異星人が産まれた日—

を宿す母体といこもお構いなし
的にペニスを出し入れする。
という名の排泄行為をするために。

巨大なを掴
みつのようなト
てきている。

大化した
の感触
部分でX-100の
しきみ、

た液体を手で掬い
それをローション替
こいた。

もみゃ
もろっ
むわ
す
ずぶ

ストーリーCG集

完全生物「X-00」の孵化予想時刻まであと数時間といったところで、緊急アラートが研究所に鳴り響いた。

「なにがあった？」

私はまだ半分開いてない目をこすりながら、管理システムAIに尋ねた。

「研究所内でヒトの死亡が確認されました。死亡者はフェルナンド研究員、シヨウ研究員の2名です。」

「なんだって！」

一瞬、AIが何を言っているのかわからなかった。だが2人は今、完全生物孵化所で経過観察記録をしていたはずだ。

段々と思考がまとまってきた。

私は危険と思いながらも、急いで孵化所に駆けた。

X-00は仮想世界での実験でも凶暴化することが何度かあった。そのため産まれてすぐに制御コードを脊髓に導入する手筈だったが、おそらくは孵化のタイミングが何らかの理由でズレてしまったせいで導入が間に合わず、このようなことになってしまったのだ。

声紋認証でロックを解除し扉を開くと、目を疑うような光景が広がっていた。
血で真っ赤に染まった床の上に、不気味な化け物が佇んでいたのだ。



私はすぐに悟った。こいつは産まれてすぐに2人の肉体を捕食し自らの肉体周波数を安定させたのだ。
そして身体が完成した以上、こいつが行うことはひとつしかなかった。

急いで踵を返し、扉を開こうとしたところで後頭部に重い衝撃が走った。

気づくと私は大の字に寝転がっていた。
ハツとして動こうとしたが、とてつもない
激痛が走る。

「うわぁー!!!」
両腕と両脚がちぎられていた。

「クソっ！どうしてこんなことを！」

そう独り言をいうが、理由は分かっていた。
何せこの生き物をデザインしたのは他でもない私だからだ。

研究所内は元素変換ガスと自動細胞治癒システムが機能している。つまり、このまま動けなくても生命活動に必要な養分は空気中から摂取できるし、自動的に傷も治っていく。

だが、研究所の空調システムのみだと両腕と両足が完全に修復し終わるまで、数か月はかかる。

「クソが。これなら死んだほうがマシだ。」
私は一瞬、死んだ2人の研究員が羨ましいと思った。

これから訪れるであろう地獄の日々を想像したからだ。

助けが来るのを待つのは現実的ではなかった。完全生物研究は政府の最高機密であり、この星の存在自体上層部の者しか知らず連絡はこちらから数か月に一度研究の経過報告をするのみであった。

「キイー、キイー」

すぐそばでX-00の鳴き声が聞こえた。

むわ

むわ

慌てて音がした方向を見ると、黒く輝く外骨格をむき出しにし、デリケートな器官が密集する胴体部周辺だけは軟質な表皮に覆われた無骨な外見の生物がそこに立っていた。



「おい、やめろ。俺は人としての尊厳を失
いたくない！」

ぷるん

言葉は当然通じない、X-00は産まれたばかりであり何も学習しておらず、本能としてプログラムされている肉体の維持と生殖以外の行動は一切取らない。



X-00はお尻をこちらに向け四つん這いになり、私のペニスを観察している。生殖器であることは気づいているだろうが、これから自身の肉体に適合するかチェックを行うはずだ。

ズズズ...

カバ

ゆっくりと口が開き、内部にある筒状の舌を押し出す不気味な音が聞こえる。



まだ膨張しきっていないペニスを吸いとり、
舌の中に収められた。

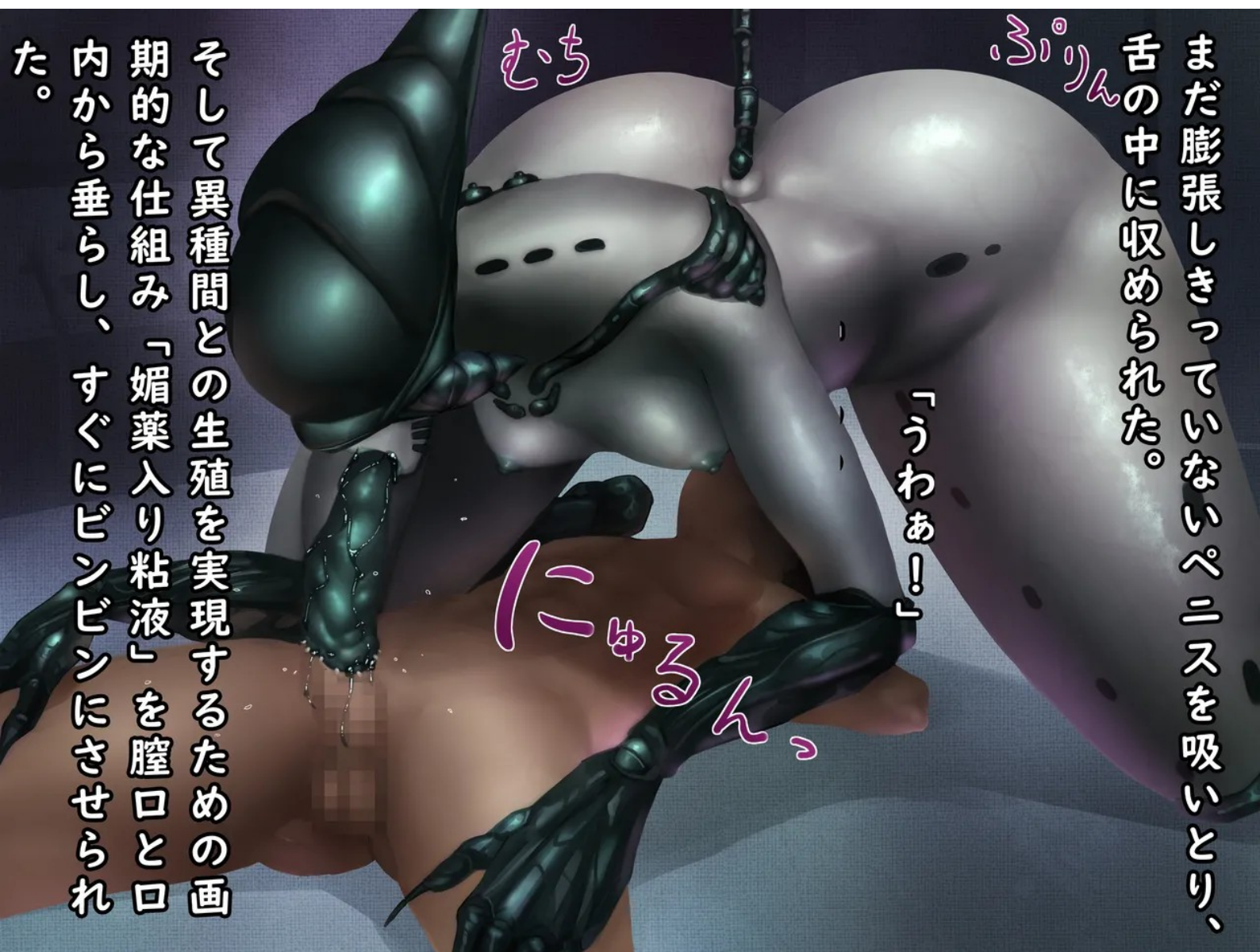
ぷりん

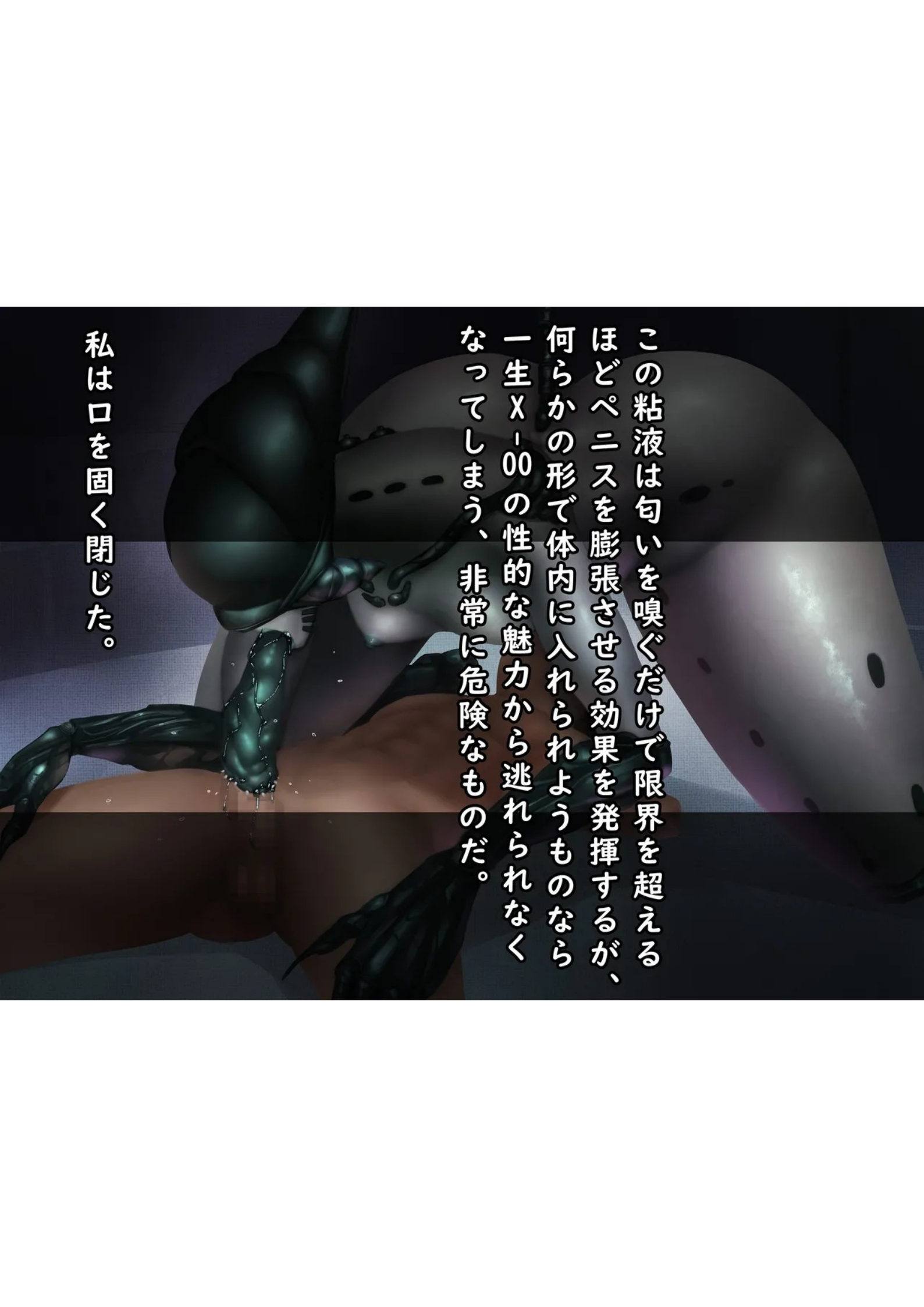
「うわあ！」

むち

にゅるんっ

そして異種間との生殖を実現するための画
期的な仕組み「媚薬入り粘液」を膣口と口
内から垂らし、すぐにビンビンにさせられ
た。





この粘液は匂いを嗅ぐだけで限界を超える
ほどペニスを膨張させる効果を発揮するが、
何らかの形で体内に入れられようものなら
一生X-00の性的な魅力から逃れられなく
なってしまう、非常に危険なものだ。

私は口を固く閉じた。

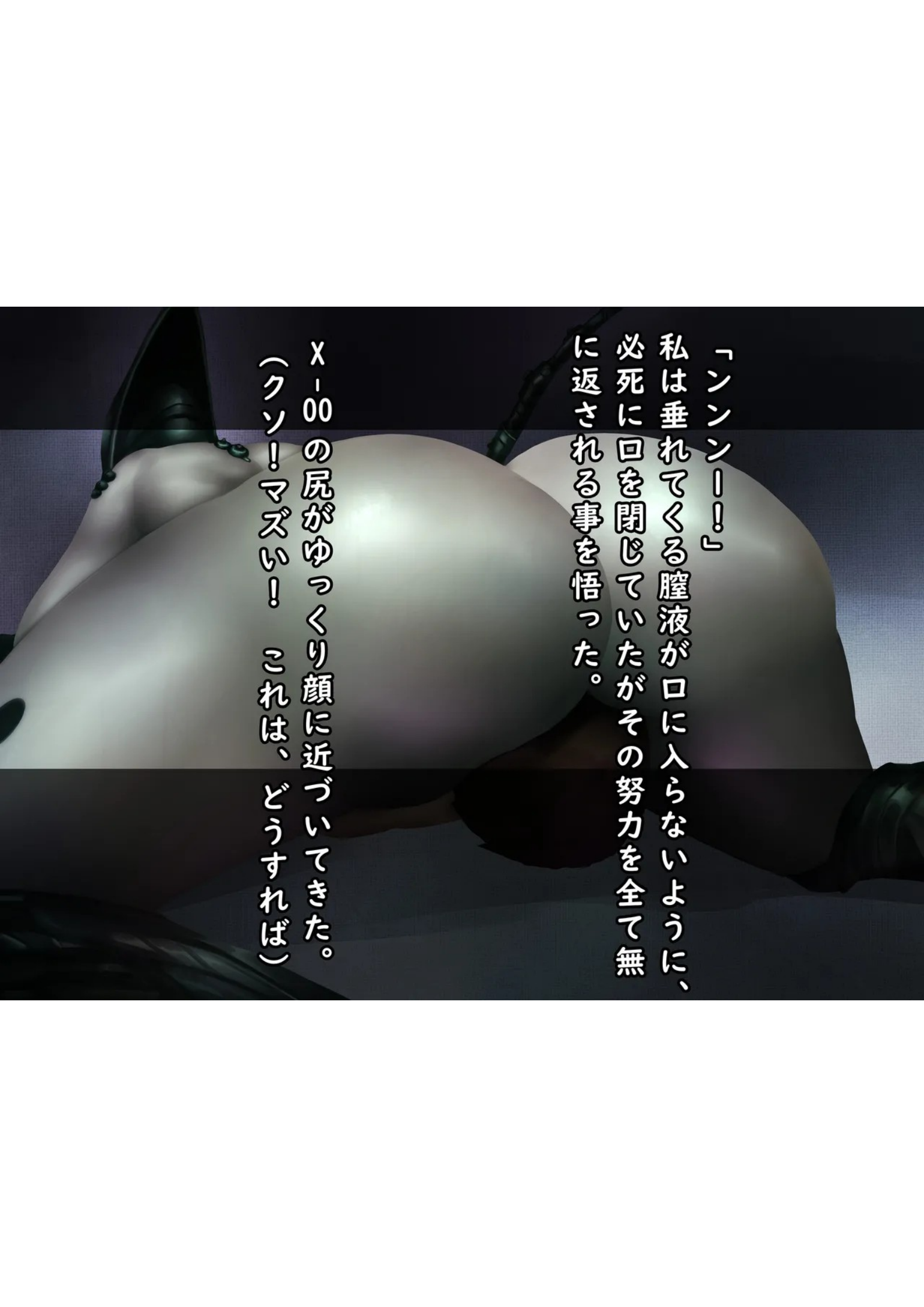


「んぐー!!」

ずる

舌内が蠕動運動を始めて、ペニスを奥へと引きずり込もうとしてくる。

舌内には無数のつぶがあり、そのせいで腰が震えるほどの快感を与えられる。



「ンンンー！」

私は垂れてくる膣液が口に入らないように、
必死に口を閉じていたがその努力を全て無
に返される事を悟った。

X-00の尻がゆっくり顔に近づいてきた。
(クソ！マズい！これは、どうすれば)

ふびにゅう...

ふぶちゅ

みっちりとした尻肉で顔全体を覆われ、
膣口を口に押し付けられる形になった。
膣液を飲んでしまわないように、工夫して
呼吸をする。

その時、舌の搾精運動が次の段階に移行した。
舌内でペニスを吸引し密着させ、蠕動運動でコリコリとしたイボで刺激するだけだったのが、ペニスをさながら便のように舌内からひり出し、そして吸い付くという運動まで加わったのだ。



ずるる

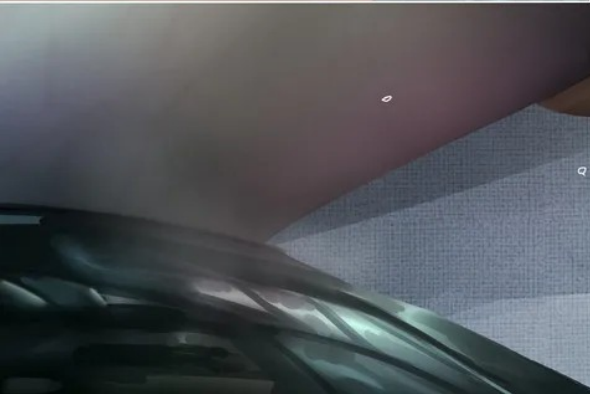
私はやり場の無い堪え難いほどの快感を歯を強く食いしばることで必死に耐えようとした。

ふん

X-00は尻を動かし始め、膣を私の鼻や口になすりつけるような行為を始めた。

ズ

私は目を閉じているので見ることは出来な
いが、触れる感触から、陰唇がビクビクと
激しく震えているようだ。
私の顔に股を擦り付けることでX-00は快
感を得ている。なんという屈辱だろうか。



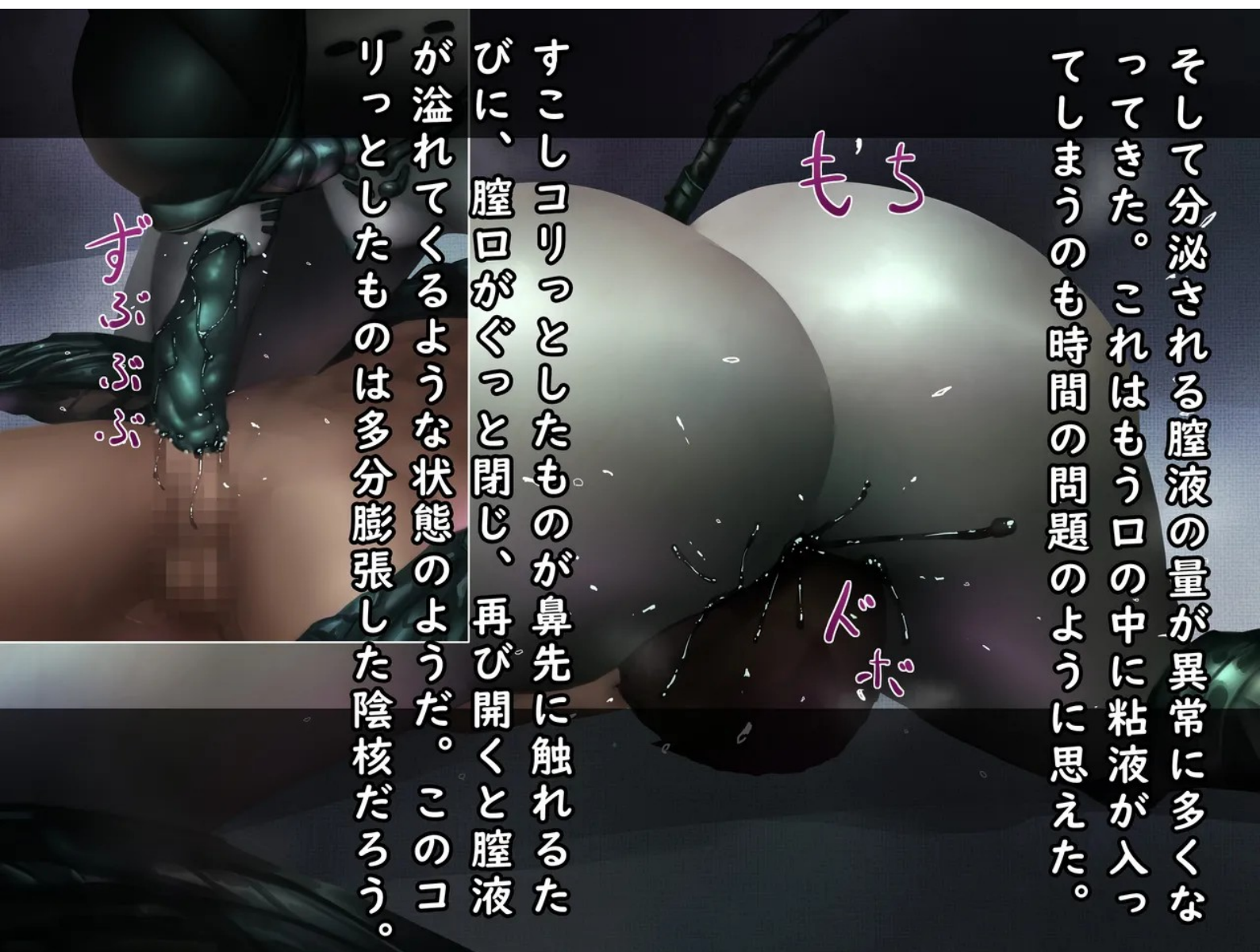
そして分泌される膣液の量が異常に多くなってきた。これはもう口の中に粘液が入ってしまうのも時間の問題のように思えた。

もち

どろ

すこしコリッとしたものが鼻先に触れるたびに、膣口がぐっと閉じ、再び開くと膣液が溢れてくるような状態のようだ。このコリッとしたものは多分膨張した陰核だろう。

ずぶぶぶ



X-00の舌は、恐ろしいほどの速度でペニスを出し入れしている。舌内から大量に分泌され続ける粘液がなければ、吸い付くときのバキューム力で食いちぎられそうな勢いだ。

私はこれまで、冷静に状況を分析し整理することで脳を活発に働かせ、快楽から逃れようと抵抗していたが、雄として生まれた以上ペニスの感覚にだけは逆らうことは出来ない。

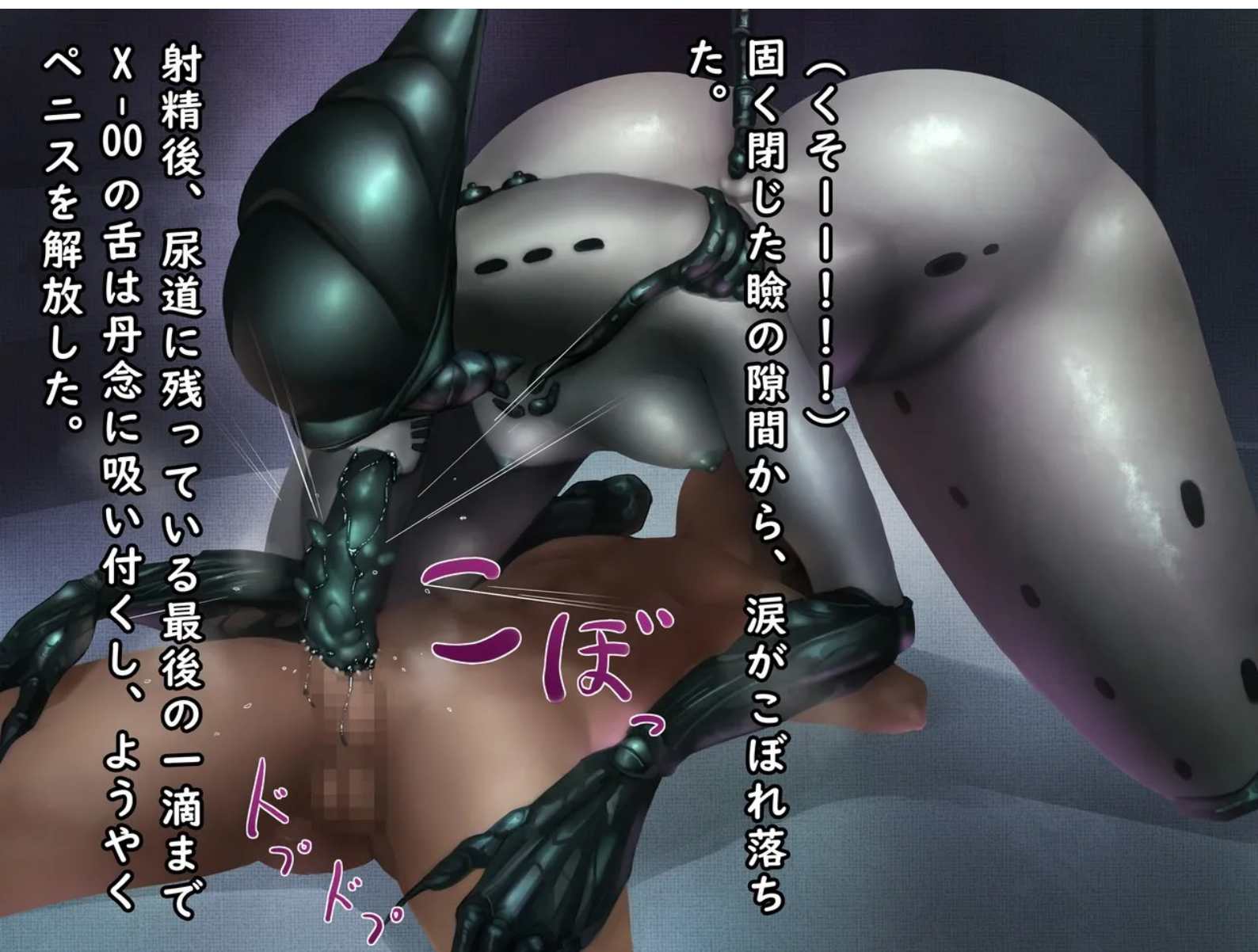


（くそー！！！！）
固く閉じた瞼の隙間から、涙がこぼれ落ちた。

射精後、尿道に残っている最後の一滴までX-00の舌は丹念に吸い付くし、ようやくペニスを解放した。

こぼ

ドッ
ドッ



そして、膣液を垂らしながらゆっくりと立ち上がり私の方を向いた。

そうだ。ここからなんだ。

X-00の媚薬入り粘液のせいで、未だにペニスはガチガチに勃起している。

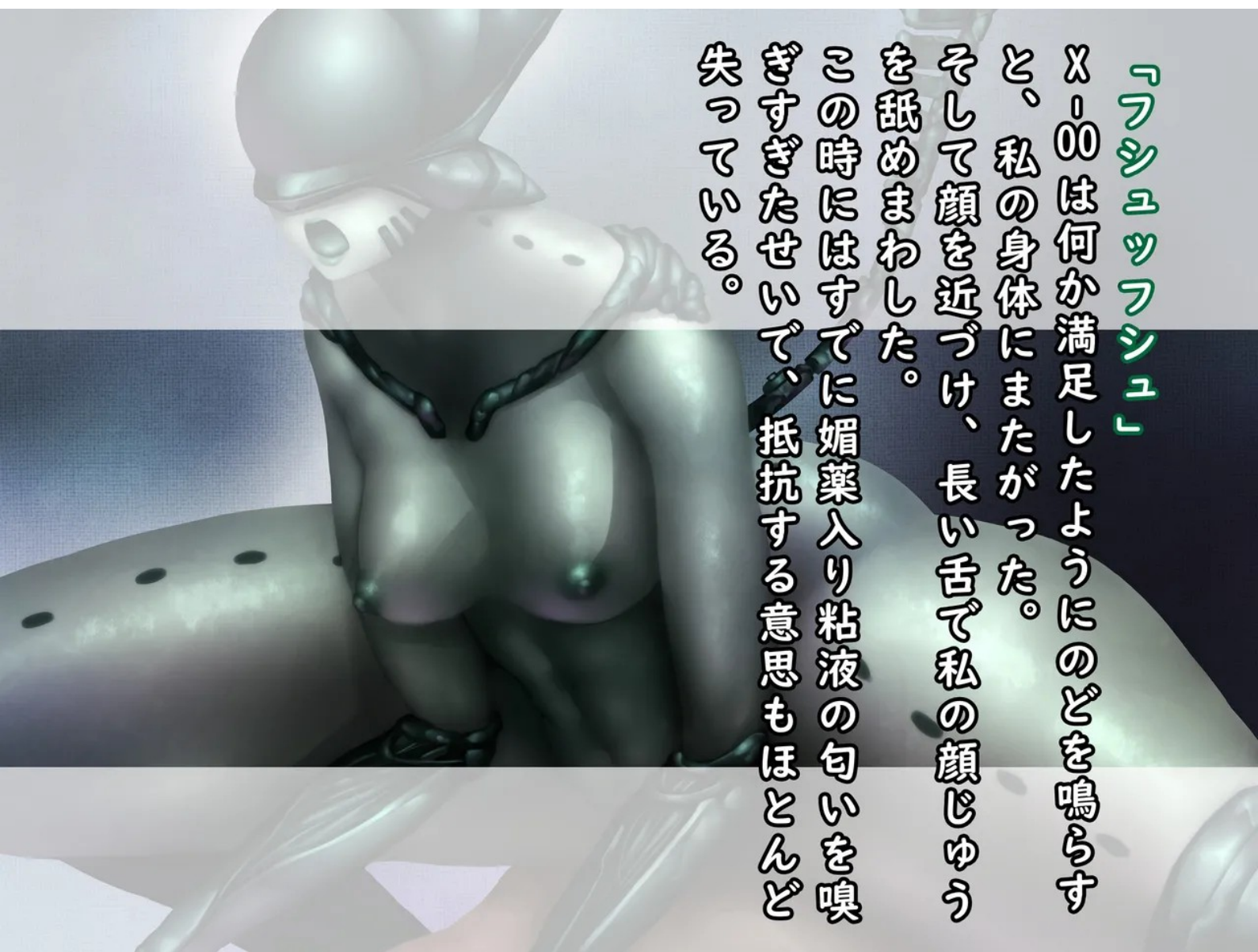


「フシュッフシュ」

X-00は何か満足したようにのどを鳴らすと、私の身体にまたがった。

そして顔を近づけ、長い舌で私の顔じゅうを舐めまわした。

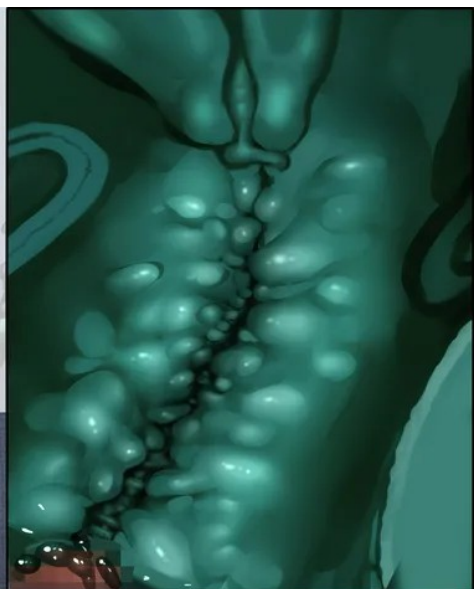
この時にはすでに媚薬入り粘液の匂いを嗅ぎすぎたせいで、抵抗する意思もほとんど失っている。



舌が口の中に入ってきて、口内に溜まっていた唾液を吸い、代わりにX-00の粘液でいっぱいになった。
このままでは呼吸が困難になると思い、すぐに嚥下したがその瞬間頭のなかが真っ白になり、鼻や腕や指がすべて性感帯になったかのような感覚に陥った。



X-00の身体が触れているすべての箇所が敏感になったペニスのようになっており、とてつもない快樂が一気に押し寄せる。
「うぐああああ！」



にゅっふ。

そんな状態の中、X-00はペニスをつかみ、
膣口に押し当ててきた。
体表は少しひんやりしているが対照的に膣
や口内は人間以上に温度が高い。
ずぶずぶと奥に飲み込まれていく。



「ぐっもうだめだ！」

すっぴん♡

ぐにゅー

根元までずっぴりに入ったところで精子を出してしまった。

X-00の媚薬粘液のせいでもあるが、先ほどの舌によるペニスの構造の調査が完了しているため、このペニスを効率よく気持ちよくし射精させるために膣内構造が最適化されているのだ。





そして今気づいたが、ペニスもだが陰囊も異常に大きくなっていた。どういう作用が働いているのかわからないが、睾丸の一つがこぶしほどのサイズになっているようだ。

ぐちゅ

精子と愛液でぐちよぐちよの膣内がさらにギュツと締め付けてきた。

一度射精しようがお構いなしにまだまだ搾るつもりらしい。

「うわああああああ！」
私はただひたすらに叫んだ。叫ぶ以外のこ
とが何もできないからだ。

重たく肉感的な尻を腰に叩きつけ、膣壁の
ゴリゴリとした部分で亀頭部分を刺激して
くる

ずしょ

ずしょ

ぐしょ



餅のように柔らかい尻をパンパンと打ち付けられるたび、快感が高まり再び射精の気配を感じる。

「たのむっ!やめてくれえ!」
「キシヤアア!」



X-00は喘ぎ、交尾の快感に満たされているようだ。

ずっ

ずこ

ぱん

ぱん

両腕両足がちぎられ、抵抗することできずX-00が満足するまで交尾を続けざるをえないこの状況は、人としての誇りが深く傷つきとても悔しいが、性的な快感だけは尋常ではなく頭がおかしくなりそうだ。

は、

は、

ぱん

ぱん



「うぐおおお！」

びく

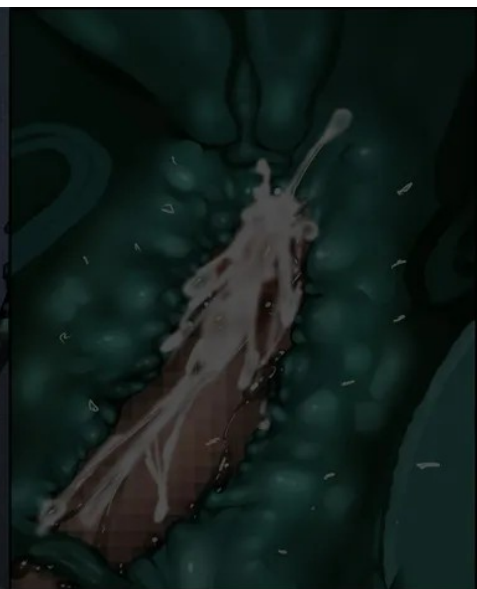
びく

ぐた

びく

ふりゅりゅ

X-00の体液の効能で何度射精しても快感は鈍くなることなく、その後10時間以上休む暇もなく精子を出し続けた。



腕と脚がある程度修復されてきたがまだ自分で移動することはできない。
後ろからしがみつかれ、体中を丹念に撫でてくる。

スリ
スリ

むちっ

悔しいが既にペニスはビンビンに勃起していた。



X-00は私の首筋や耳を舐めながら、ペニスに触れてきた。

指でこりこりとじらすように刺激してくる。ただ精子を搾るだけでなく、このように相手の反応を観察し学習することで、より充実した交尾をしようとする。これもまたX-00の性質だ。



人差し指と親指で、カリの部分を重点的にこすってきた。

「うぐっ」

じゅ

ずるっ

むち

身体がびくっと反応してしまう。
しばらくの亀頭攻めを受けたのち手全体で
ペニスを掴んできた。



X-00の握力は1000キロ以上あるため、少し加減を間違えたら簡単にペニスが握りつぶされてしまうが、その恐怖さえもゾクゾクと背筋を這うような快感として脳が変換してしまっている。

むち

しゃー
ー

しゃー
ー

ストローク運動を始めた。

力加減と指の動かし方が絶妙で、力強く丁寧にペニスを揉みながら腕を動かしてくる。



体表からぬるぬるの粘液を分泌しているおかげで摩擦でペニスが傷つくことはない。

もみゅん

しゅ、しゅ、

肥大化した陰嚢を優しく掴み、もみもみとマッサージする運動も追加された。

精子を製造し続けて、熱くなっている陰嚢にX-00のひんやりとした手で包み込まれるのはとても気持ちよく、思わず息がもれる。



手のストロークに合わせて、腰をすこしカク
カク動かしていると射精したくなってきた。

「うわぁ、でるでるっ」

しゅっ

しゅっ

ずっ



その時、X-00の手の動きが止まった。
「そんなんっ・・・!!」

ぴた

射精のタイミングも完全に把握されている
ようだ、呼吸のリズムや微妙な筋肉の動き
から読み取っているのだろうか。



そして射精感の波が去ったあと、再び手を動かし始めた。

「キシュッ」

X-00は私の反応をみて楽しんでいるようだ。

次こそ気持ちよく射精してやると心に決め、できる限り腰を動かす。
思ったよりすぐにまた射精感がやってきた。



「ああっ

いいっ!でるっ!」

ぎゅ

すると今度は痛みを感じるほど強く握られ、
強引に射精を止められた。
「こいつっ!なんてやつだ」





そしてその後何度も射精寸前までしごかれ
ては止められ、結局一度も射精させてもら
えなかった。

後
日

X-00が近づいてきた。媚薬入り粘液のせいか、X-00の姿を見るだけでビンビンに勃起するような体になっていた。

トロ〜…

脚を大きく広げて私を見下ろしてきた。股からはきらきらと光る粘液が糸を引いている。

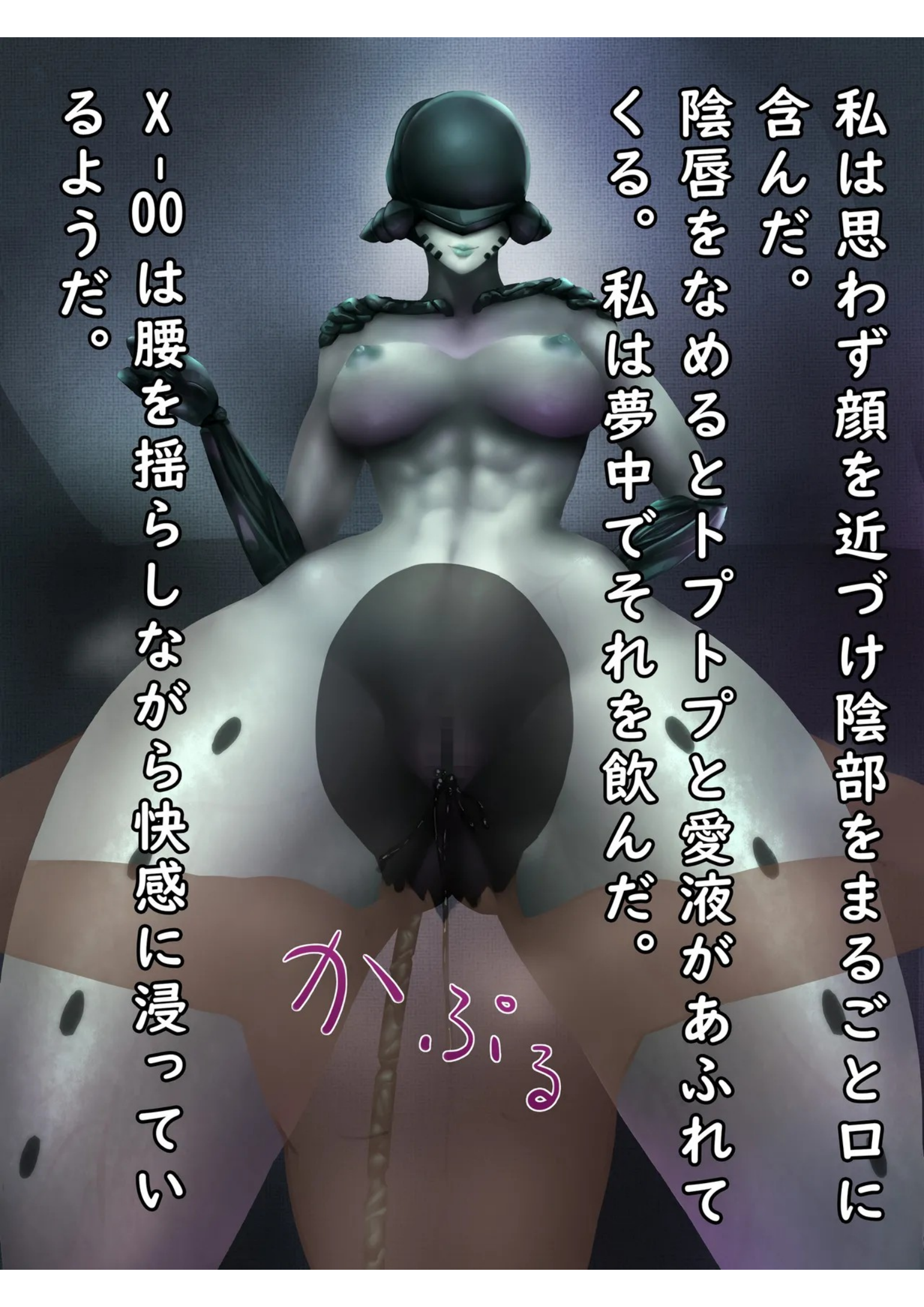


私は思わず顔を近づけ陰部をまるごと口に含んだ。

陰唇をなめるとトプトプと愛液があふれてくる。私は夢中でそれを飲んだ。

X-00は腰を揺らしながら快感に浸っているようだ。

か・ふ・る



ここにペニスをぶちこみたい。それ以外のことは何も考えられず、今はただ夢中でしゃぶり続けた。

ぐく

ぐちょ



X-00は強引に私の足をもちあげ。躊躇なくペニスをのみこんだ。限界まで性欲と感度が上がっている中、前回射精させてもらえなかったせいで、挿入した瞬間に少し射精してしまった。

ガッ

ずふ

むち



しかし興奮や快感は収まることなく、X
100も気に留めず腰を振ってきた。

もち..

ず..

ず..

肥大化した陰囊部分でX100の異常に豊満
な尻の感触を楽しみ、すぐにまた射精しそ
うになってきた。



すると、子宮口のような部分が、亀頭部分にかぶさってきた。
子宮のより深いところに精子を受け止めようとしているようだ。

ぱん

ずぶ

ぱん

ぎゅぽ

ぐに



龟头を覆っている器官がぐりぐりと刺激を与えてきて、とてつもない快感が押し寄せる。

この子宮口も、私のペニスの形や大きさに合わせて搾精しやすいように変形しているのだろう。脳が溶けそうなほど気持ちがいい。

ぱん

ぐにぐに

ぱん



そんなえげつない器官に亀頭を弄られながら、腰をパンパンとうちこまれ、本気で私の子種を搾り上げようとしてくる。

「でるっー番濃ゆいのがでる！」

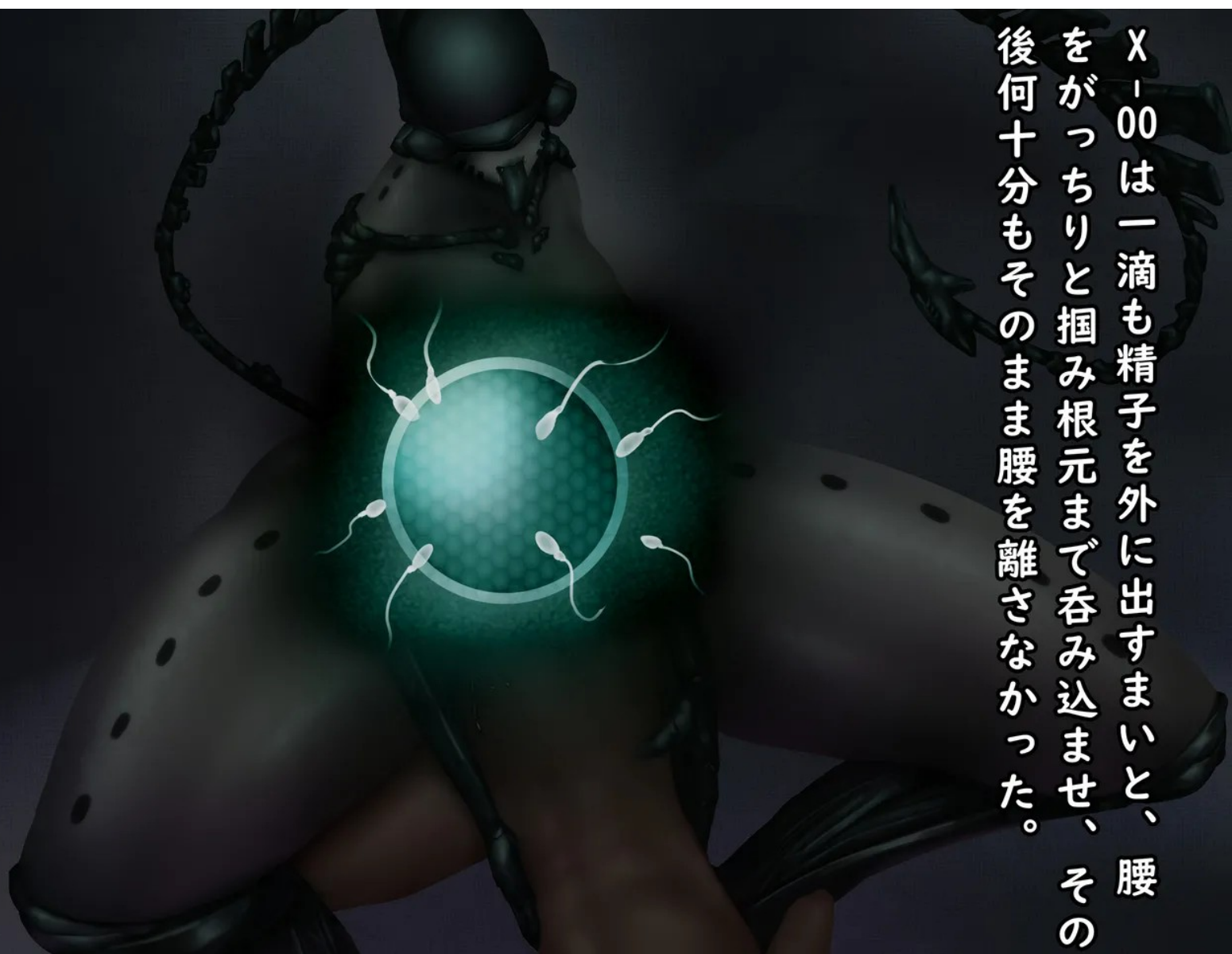


腰をがちりと掴まれ、根元まで呑み込まれた瞬間

非常に粘度の高いぷりぷりの精子が、子宮の奥にごくごくと飲み込まれていった。



X-00は一滴も精子を外に出すまいと、腰をがっちりと掴み根元まで呑み込ませ、その後何十分もそのまま腰を離さなかった。



数か月後

腕と足がほぼ完全に再生されてきた。

だが連日の搾精による肉体的、精神的な負担から何もやる気が起きず、孵化所ですつと横になっていた。

X-00が普段どこにいて何をしているのかなんていうことも知らない。

あるときふとやってきて精子を搾りつくすとまたどこかへ去っていくのだ。

ぴちゃっ、ぴちゃっ、ぴちゃっ。
X-00の足音がする。だが少し様子が違う
ようだ。歩くスピードがいつもと比べると
すごく遅い。

なんだろうと思ひ足音がするほうに視線を
移すと、すぐにその理由が分かった。



「に、妊娠している!?!」

お腹が膨れ上がり、乳房も大きくなっ
たのだ。

X-00はゆっくりと私にすり寄ると、股間付近のにおいを嗅いできた。
普段なら強引に押し倒してきて、無理やり精子を搾り取ってくるところだが、ずいぶんとしおらしい動きをしている。



子を身ごもったせいで交尾の対象であった私に対し従順になったということだろうか、それか妊娠によって肉体的性能が著しく低下しているのか、答えはわからないが・・・。

「これは、チャンスだ」
この研究所内にはあらゆる状況に備えた拘束具が仕掛けられている。



私は後ずさりながらX-00をうまくひきつけ、実験室まで誘導していく。

そして台の上にながらせたところで緊急拘束スイッチを押した。
「キィー！キィー！ー！」

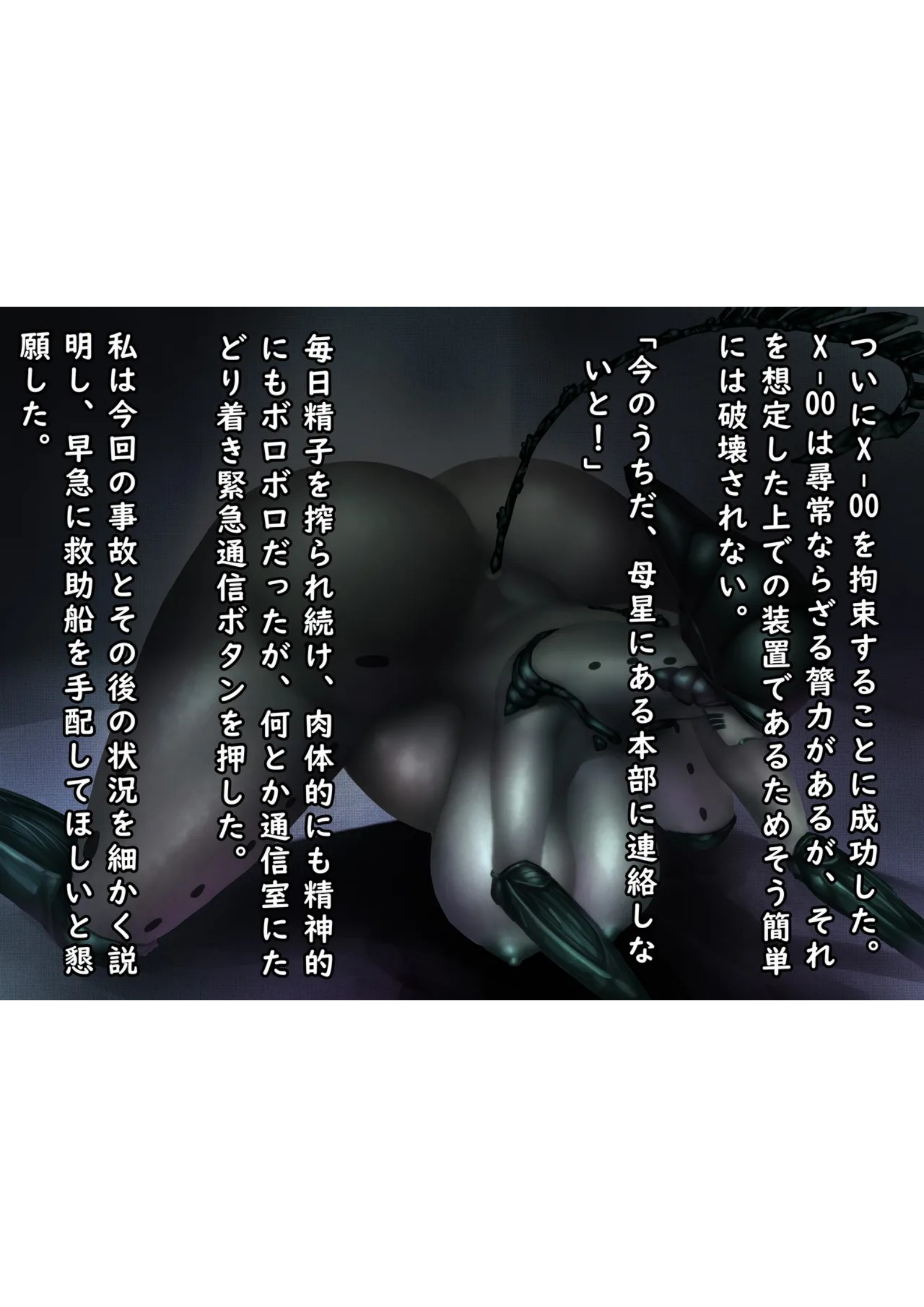
ふん

むっ

どたん

ガッ





ついにX-00を拘束することに成功した。
X-00は尋常ならざる膂力があるが、それ
を想定した上での装置であるためそう簡単
には破壊されない。

「今のうちだ、母星にある本部に連絡しな
いと！」

毎日精子を搾られ続け、肉体的にも精神的
にもボロボロだったが、何とか通信室にた
どり着き緊急通信ボタンを押した。

私は今回の事故とその後の状況を細かく説
明し、早急に救助船を手配してほしいと懇
願した。

しかし、政府の対応は想定していた中で最悪のものだった。

「悪いが、君のDNAにもX-00の影響があるかもしれないし危険すぎる。回収は無理だ。」

「ですが！完成したんですよ！完全生物が。」

「実はな、6号惑星と52号惑星もすでに実験を成功させているんだ。」

「そ、そんな。」

「だから君らが作ったコントロールできない危険な生物は我々には必要ないのだ。」

「じゃあ、私はこれからどうすれば。」

「好きにしまえ。本来ならば危険な惑星はミサイルで消滅させるところだが、君の功績を讃えてこちらのデータ消去のみにしておくよ。」

「そんな、待ってください!!!」

「ブツ、ツーーーー。」

この星はワープ航行設定を政府権限で解除され、ネットワークも永久遮断された。

政府はこの星を「存在しない星」としたのだ。

もう二度と母星と連絡を取ることは出来ないし移動することもできない。

「くそおおおおお！」

私は心の底から無尽蔵に湧き上がる怒りをどこにぶつければいいかわからず、壁を殴り続けた。

「くそがっ！命令通りやったじゃないか！完全生物も完成した！」

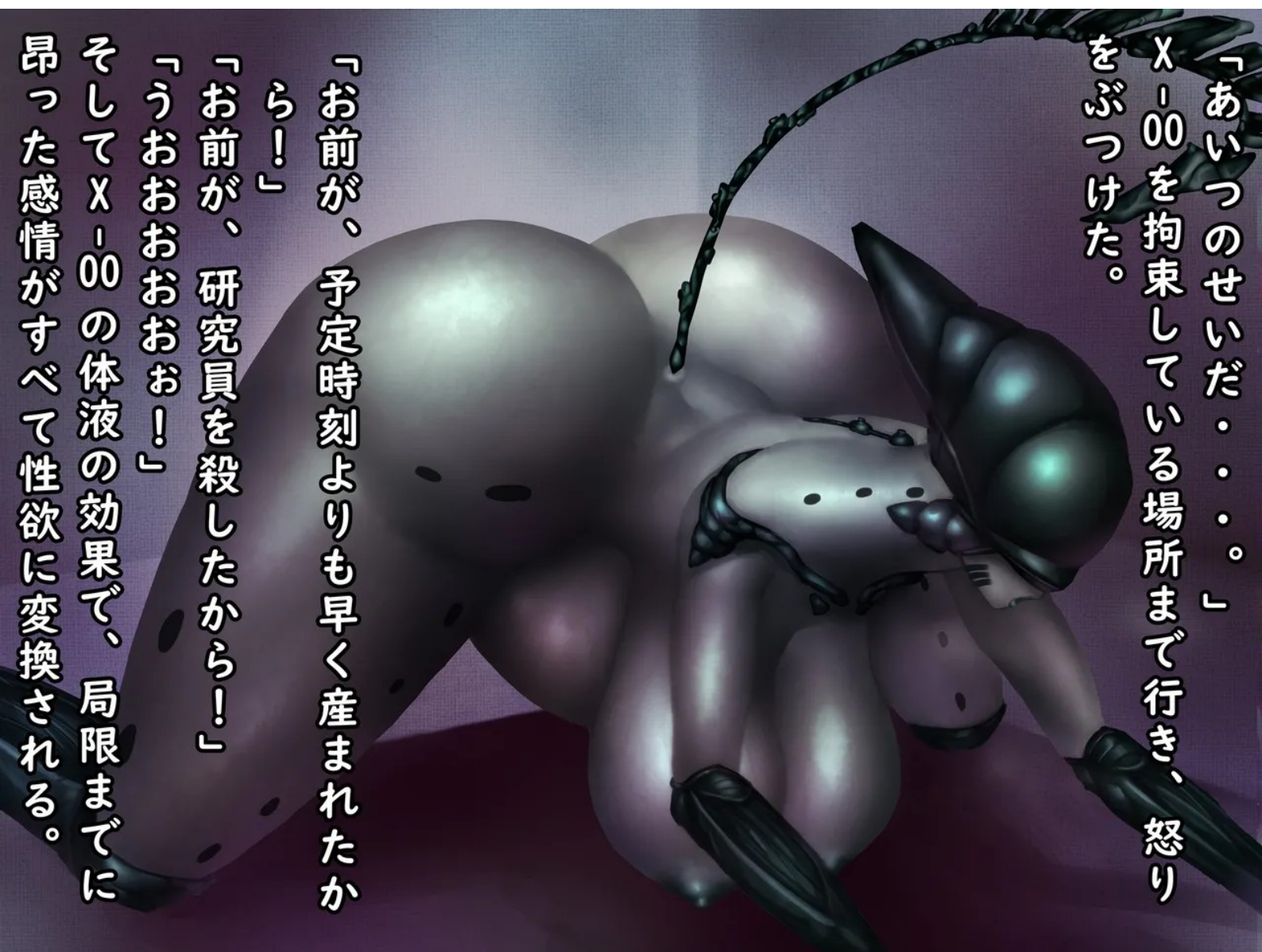
「なのにどうしてこんなことに！！」

「あいつのせいだ……。」
X-00を拘束している場所まで行き、怒りをぶつけた。

「お前が、予定時刻よりも早く産まれたから！」

「お前が、研究員を殺したから！」
「うおおおおお！」

そしてX-00の体液の効果で、局限までに
昂った感情がすべて性欲に変換される。



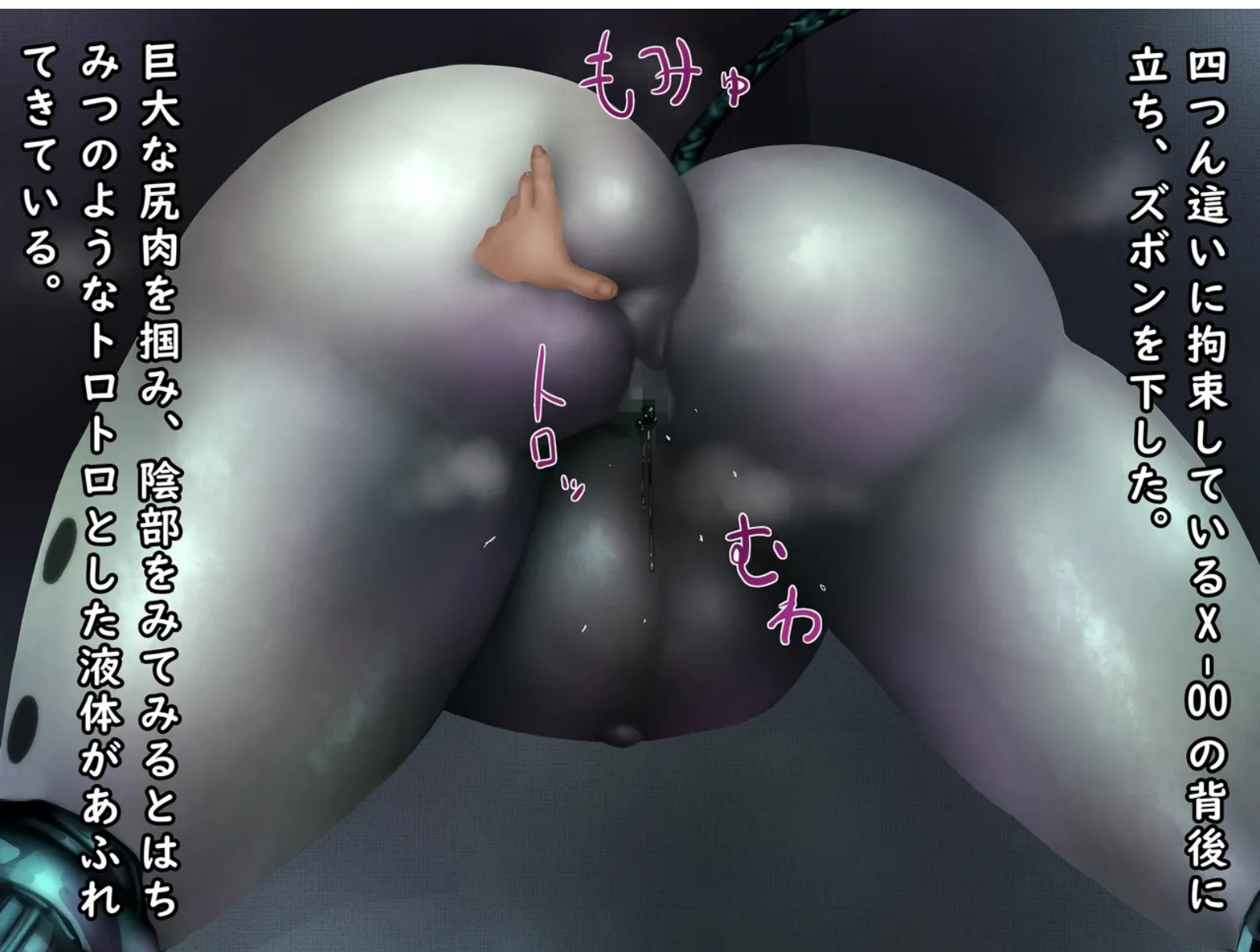
四つん這いに拘束しているX-00の背後に立ち、ズボンを下した。

もみゅ

トロッ

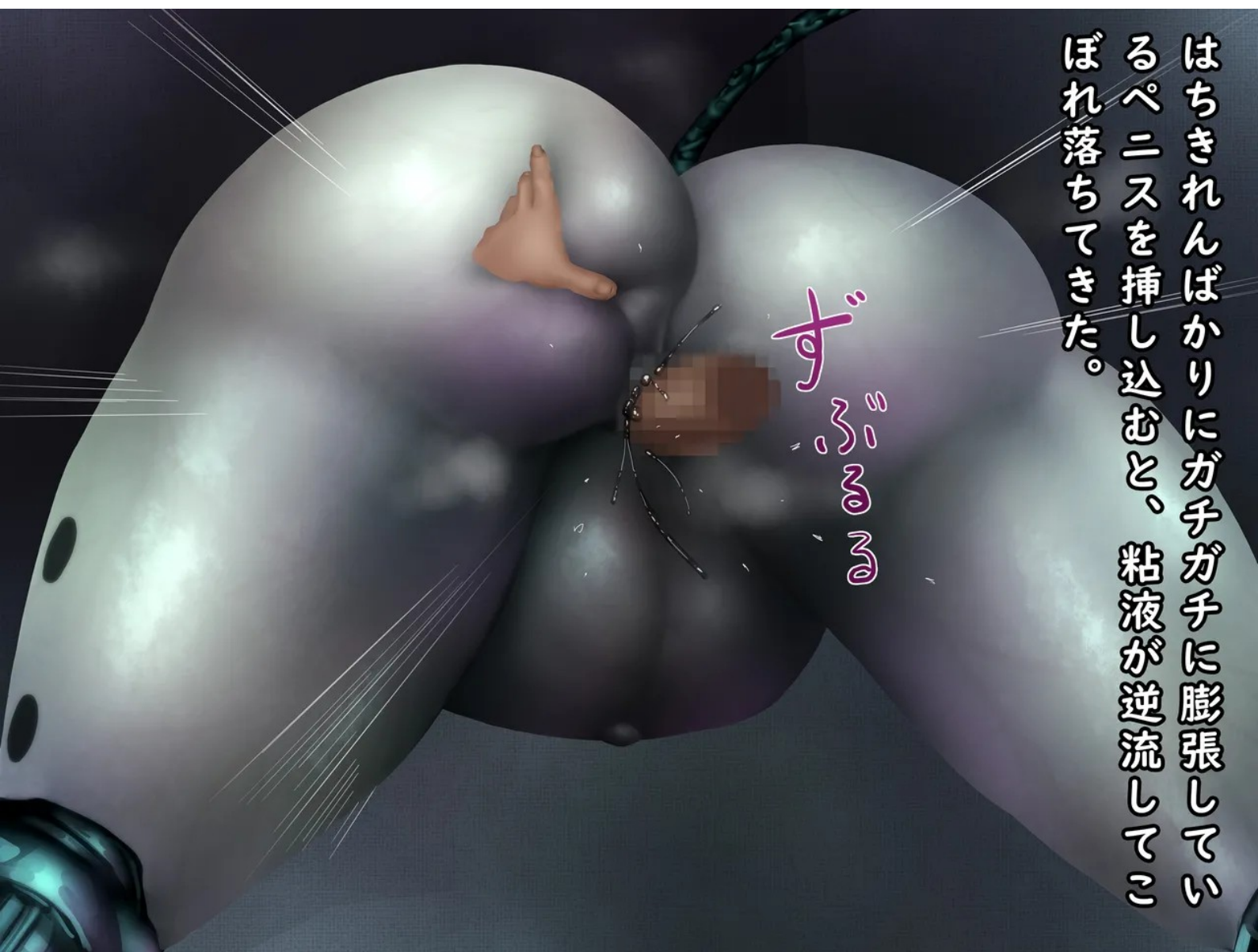
むわ

巨大な尻肉を掴み、陰部をみているとはちみつのようなトロトロとした液体があふれてきている。



はちきれんばかりにガチガチに膨張しているペニスを挿し込むと、粘液が逆流してこぼれ落ちてきた。

ず
ぶ
る
る



膣内はとても熱く柔らかいが、ぎゅうぎゅうに締まっている。妊娠しているからか、いつもと膣内のコンディションが違っているようだ。

もちっ

ふっもちっ



強力に絡みつく膣肉をぶちゅぶちゅとほどきながら奥に進め、根元まで入れ込んだ。





「キシヤアア!」

X-00が悲鳴を上げる。胎児を守りたい母の悲痛な叫びなのか、快楽からなのかわからない。



ぽて

びくん



そしてこの無尽蔵に柔らかくずっしりと重
たい尻を、爪を立てて思いつき握り、バ
チバチと腰を打ち付けた。
「このっ！この！」



耐えがたいほどの怒りと絶望、悲しみや焦りをペニスの一点に込めて、突き刺しているような感覚だった。

ぱん

ぱん

ぱん

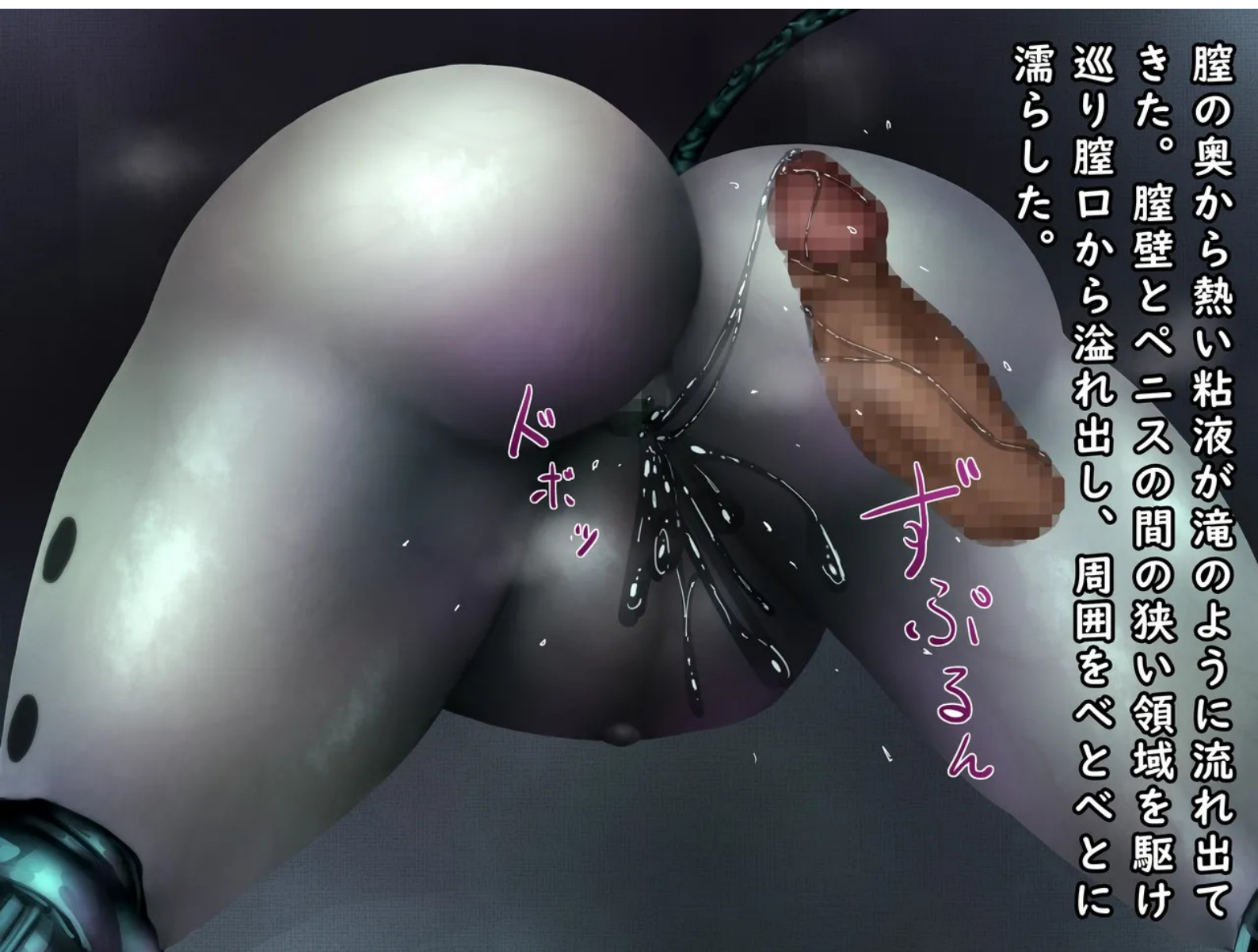
ズン



すに

「おらっどうだ!」
「キキー!」

膣の奥から熱い粘液が滝のように流れ出てきた。膣壁とペニスの間の狭い領域を駆け巡り膣口から溢れ出し、周囲をべとべとに濡らした。



ドポッ

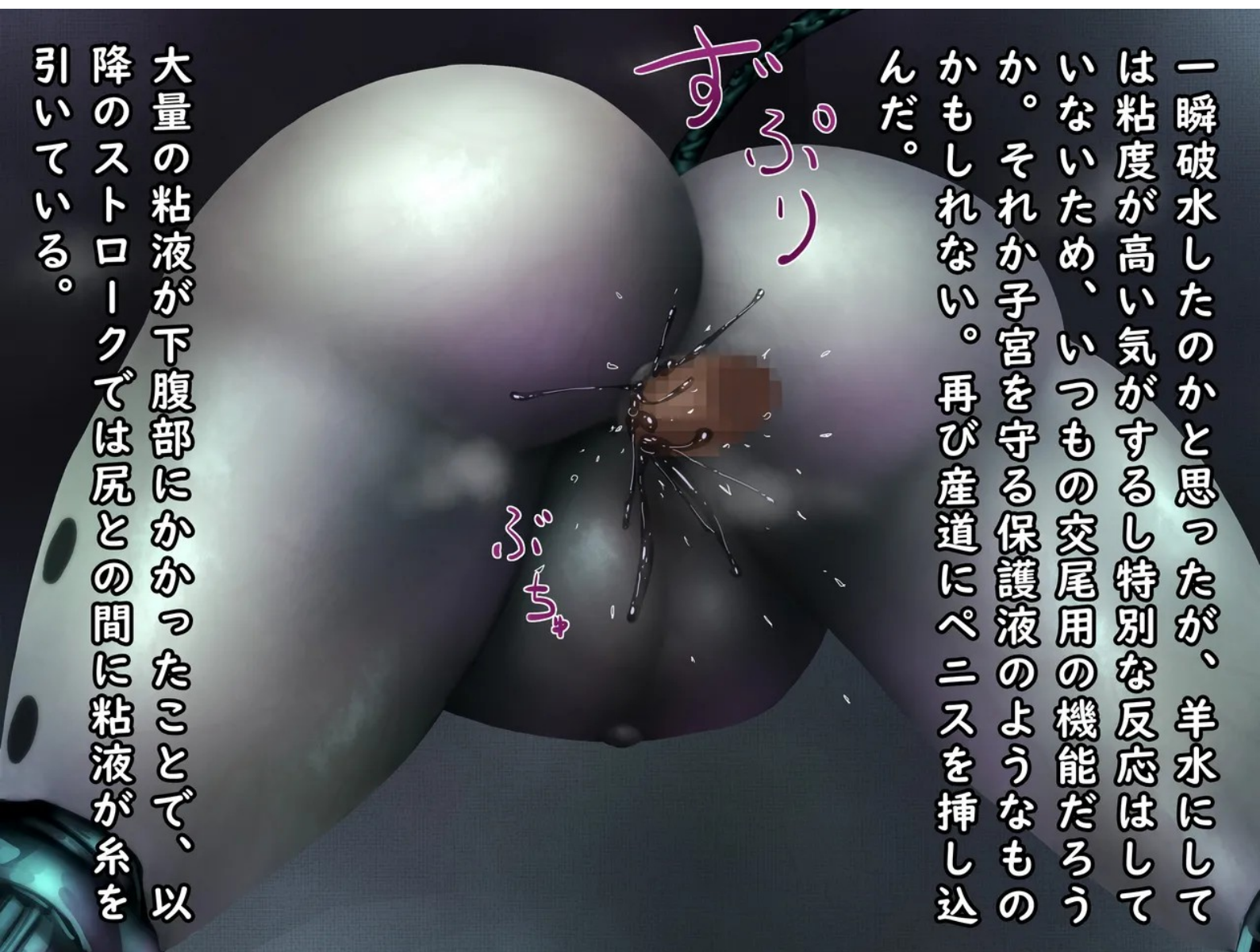
ずぶるん

一瞬破水したのかと思ったが、羊水にしては粘度が高い気がするし特別な反応はしていないため、いつもの交尾用の機能だろうか。それか子宮を守る保護液のようなものかもしれない。再び産道にペニスを挿し込んだ。

すぷり

ふいっ

大量の粘液が下腹部にかかったことで、以降のストロークでは尻との間に粘液が糸を引いている。



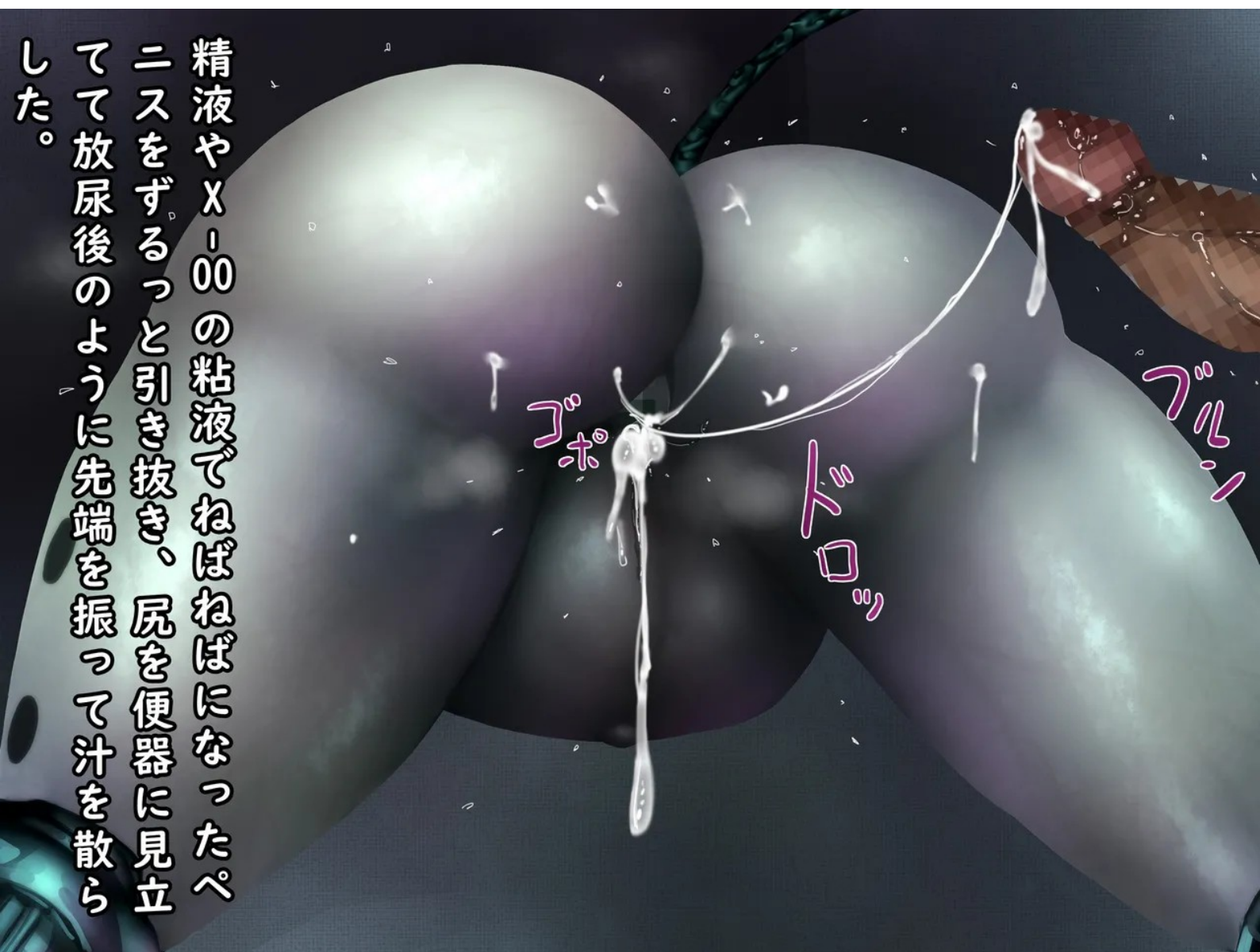
胎児を宿す母体ということもお構いなしに、
攻撃的にペニスを出し入れする。
射精という名の排泄行為をするために。



子宮口にペニスの先端を暴力的に押し付け、
力を込めて射精した。



精液やX-100の粘液でねばねばになったペニスをずるっと引き抜き、尻を便器に見立てて放尿後のように先端を振って汁を散らした。



ゴポ

ドロツ

ブルン

そしてX-00をそのまま放置して、実験室を出た。



12時間以上眠り、体力と精力が回復したところ
で再びX-100のもとに行った。

さて今日はどうやって性欲を満たそうか。

妊娠によって肥大化している乳房が目についた。

ぷるん

ぼってり

（今日はおっぱい使ってみるか。）

両腕の拘束をいったん解いて、逆に背中
のほうで両腕を拘束した。



おっぱいを乱暴に掴みとりぎゅっと強く握
ったりして感触をたしかめる。

むにゅ

むにん

マシュマロのように柔らかく、ぐにぐにと
どんな形にもフィットしそうだ。



乳首をぎゅっと掴み、持ち上げた。思ったよりも重い。

「ギイツ」

ぎゅう

ずしり

びく

そしてX-00は苦しそうに声を上げた。そういえばこの生物にも一応痛覚はあるのだ。



そして両方の乳房を掴んで、ギンギンにい
きりたつペニスを挟んだ。

むににに

ふん

柔らかいがずっしりとしていて、もっちりと包まれている感じがする。



そのまま腰を振って、やわらかい乳でペニスをしごいた。

X-00の皮膚表面から分泌されている粘液のおかげでこのままスムーズに擦ることができる。



もにゅっ

もにゅっ

ぽぽ

むち

だんだん気持ちよくなってきた、しごくス
ピードを速めていく。

はちゅ

はちゅ

ふっちゅ

ぱちゅ

ぶちゅぶちゅと液が飛び散り、一番気持ち
よくなったところで



X-00の乳内にネバネバした精子をぶちま
けた。



ブリュ

ド
ッ
ッ

呼吸を整えていると少し催してきたため、
私の子を孕んでいる腹に小便をかけること
にした。



3
3
3
3
3
3
3

び
ちゅ

び
ちゅ





今回は正面を向かせて拘束した。こうすれば、妊娠しているお腹に触れながらセックスができる。

お腹を撫でると、ドクンドクンと力強い鼓動を感じる。
私がこうしてお腹に触るとX-00は少しうれしそうに微笑んだ。



膣口付近に触れると、出産のときが近いのか、興奮しているのか、ずぶずぶに濡れており絶え間なく粘液があふれてきている。

「キィイ」

ぴく

もち..

ずぶずぶ

あふれ出る粘液に対抗するようにギンギンのペニスをぬぶぬぶと挿入していった。



出産直前だからだろうか、異常に中は熱く
なっており、胎児の鼓動がドクドクと響い
てくる。



ペニスにとっては単純に刺激的で気持ちよ
く、すぐに興奮が最高潮に達してきた。た
まらずX-00に口づけをし唇と舌をぐちゅ
ぐちゅとねぶった。

生命の鼓動が響く熱い膣肉は今しか味わえないと思い、お腹の子供のことはおかまいなしに腰を叩きつけた。

すちよ

すぽん

すぽん

すぽん

は、
は、

「はあっはあっ

気持ちい！」



大きく張り出したお腹をがっしりと掴み、
ぎゅうっと握った。

「ギヤアアア」

びくん

ぎゅう

ブルッ

痛いのか、それとも自分の子供を守ろうと
するためか本気で嫌がっているようだ。



あまりの快感に手や足の先がジンジンとし
びれてきた。

ずば、

ずば、

ずば、

ぐちゅ
ふちゅ

「うわあああ 出るっ！出産直前の産道に、
ドロドロの精液をぶちまけるぞ！」





思い切り射精した瞬間、パツンッと破裂音がして、熱湯のように熱い液体が膣の奥から流れ出てきた。

ズュリユリユ

「ギイイイ！」

ぴく

ぴく

ブルッ

そしてX-00の身体がビクツと痙攣し、それと同時に青くキラキラと輝くものが、白いねばねばの精子をまとった状態で出てきた。



X-00は全身で力み、お腹の中から青い胎児を押し出した。

「キュイイ！キュイイ！」



すぐに腕の拘束具を外してあげると、生まれたばかりの青い生物を抱きかかえた。



X-00はいとおしそうに自分の子を撫でて、さっそく母乳を与えていた。

私は感動していた。

子を持ったことのない身のため、外見はともかく、自分の遺伝子情報が刻まれた新たな生命の誕生に心を打たれ、気づいたら涙ぐんでいた。



しかしX-00の媚薬体液の影響下にあるため、どんな感情も衝動も全てが性欲、性衝動に変換される。

すぐに涙は乾き、かわりにペニスがかつてないほどメキメキに膨張していた。



青い子の肌に触れ、母乳や羊水や膣の粘液が混じった液体を手で掬い取った。そしてそれをローション替わりにしてペニスをしごいた。

「はあっはあっ。なんて美しいんだ！」

にゅー

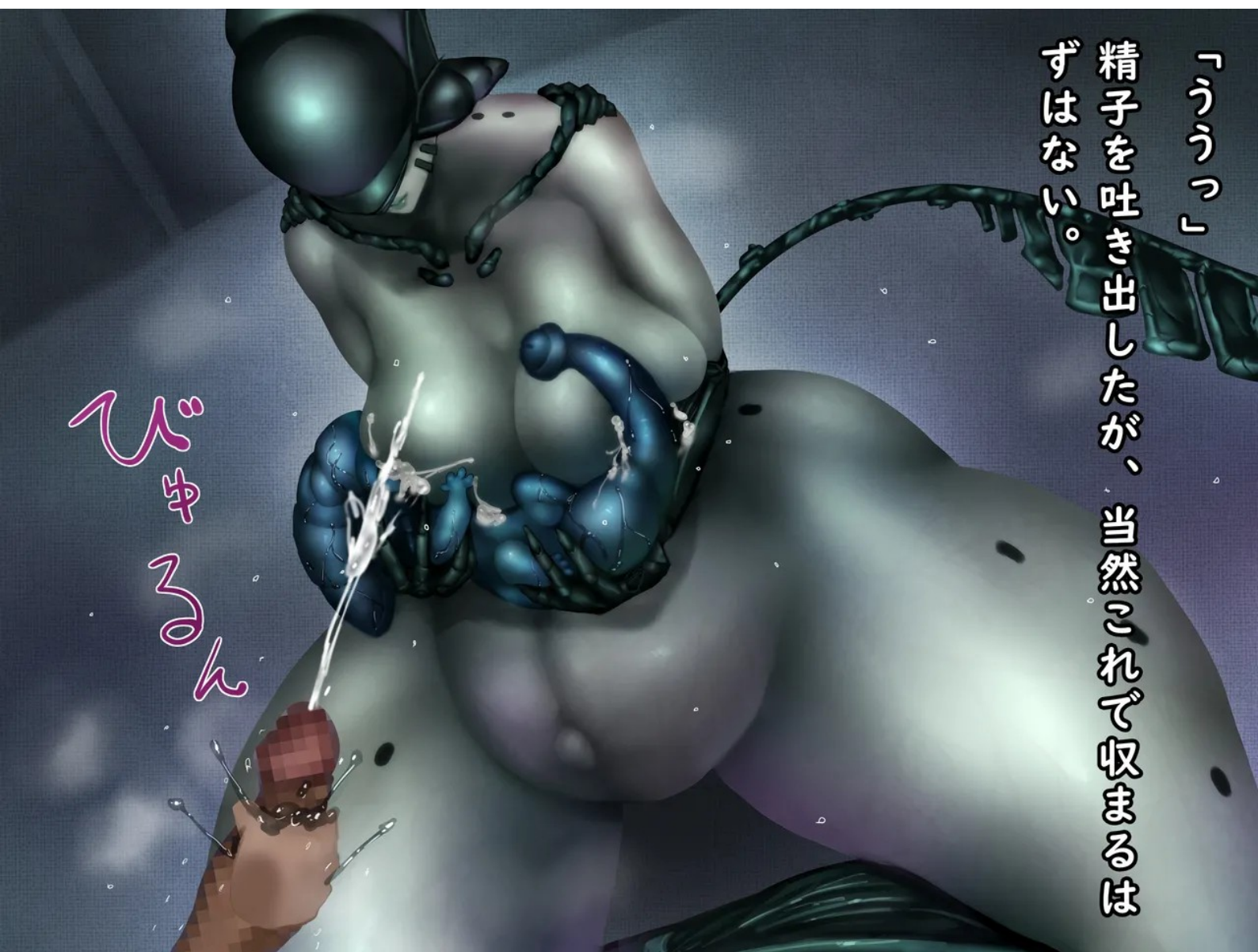
にゅー

にゅっ



「ううっ」
精子を吐き出したが、当然これで収まるはずはない。

びゅるん

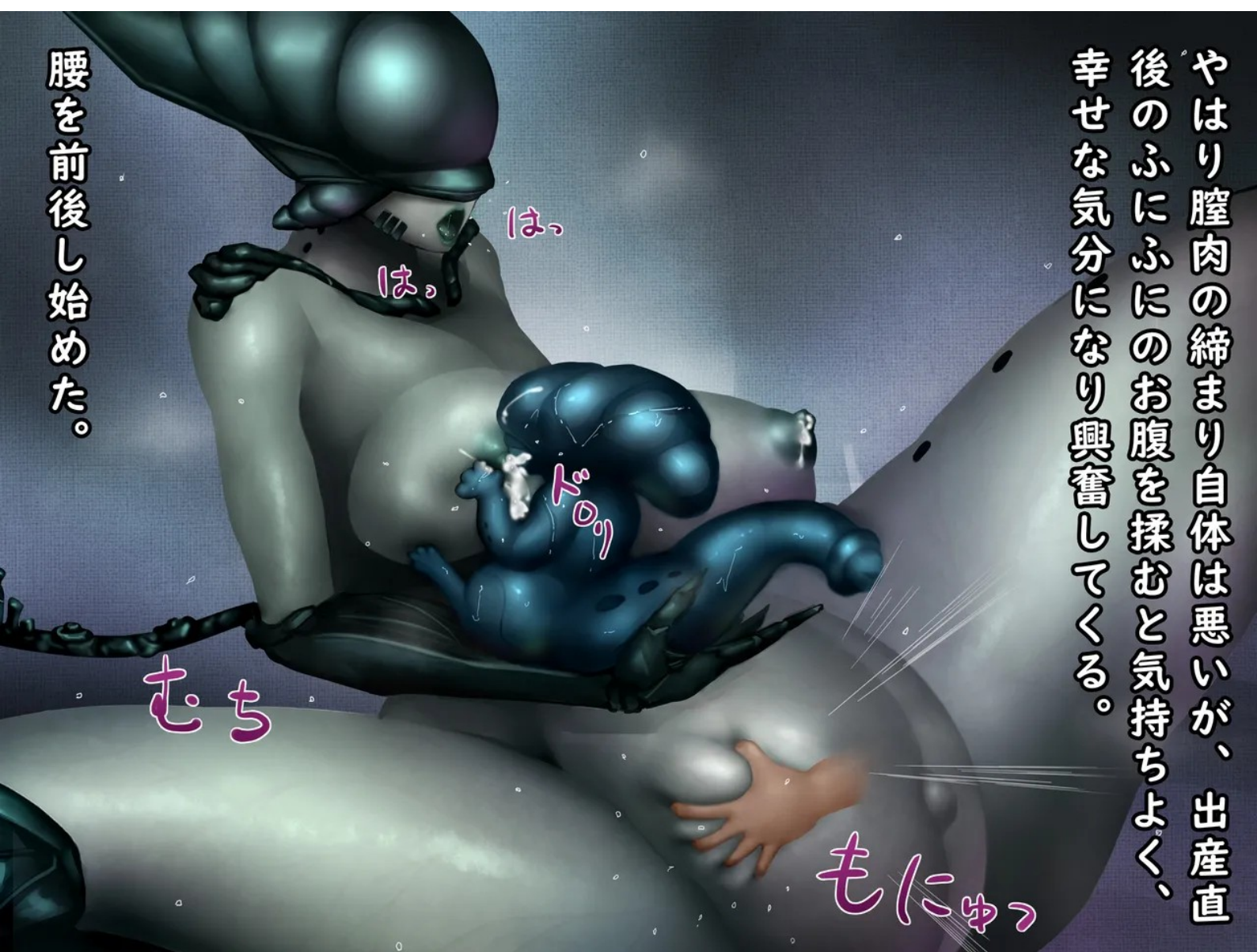


が
ば
あ

ぶ
ぶ
ぶ

た
ま
ら
ず、
X-00
を
押
し
倒
し
た。
意
外
と
X-00
は
抵
抗
す
る
こ
と
な
く、
出
産
直
後
の
膣
を
が
ば
あ
っ
と
開
い
て、
挿
入
を
促
し
て
き
た。

やはり膣肉の締めまり自体は悪いが、出産直後のふにふにのお腹を揉むと気持ちよく、幸せな気分になり興奮してくる。



腰を前後し始めた。



アッ

ゴッ

ゴッ

セックスの最中でありながらも母体の身体が揺れるのを、まるでゆりかごのように感じていたのか、赤ん坊はおいしそうに母乳をぐくぐく飲んでいる。

私も母乳を飲んでみたくなり空いているも
う片方の乳首を口にふくんで、揉みながら
吸い上げた。

ゆっさ

「うああっ 気持ちいいよお」

ずい

いる

ゆっさ

むぎゅー

ゆっさ

X-00の体液だけあって、やはり媚薬的な
効果があるのか脳が快楽にまみれて、ぼー
っとしてくる。



ゆっくり腰を動かしつつ、母乳を飲みながらX-00と青い子を両腕に抱きしめた。





この星は酸素がほとんどなく、とても人が住める星ではないが、基地の中にいれば生命維持システムにより飢えることはないし死ぬこともない。

そしてX-100の体液の効能で性欲が衰えることも死ぬまでないだろうし、このまま老衰するまでひたすらにセックス漬けの毎日を送るのも悪くないかもしれない。

最初はそう気楽に考えていたが、実際はそう簡単に割り切れるものではなかった。私はそれほど器用な人間ではない。

このような生活が続けていても肉体が死ぬ前に魂が死んでしまうだろう。

生きることには「目的」や「信念」が必要なのだ。

高度に進化した生物は、やがて同種間で争い滅ぼし合うと言われている。

いつか人と人が争いを始めたとき、「人類共通の脅威」として投入することで争いをやめさせ一致団結させる。それが完全生物研究と開発の理由だ。



「共通の脅威」というだけであれば、感染力と致死性の高いウイルスでもよいという考えもあったようだが、ビジュアルがないと脅威として分かりづらいということと、誰の目から見ても分かりやすい脅威「完全生物」であるべきだという結論に至ったらしい。

だがこれは、一歩間違えば逆に人を滅ぼしかねない危険なものだ。

私は元々この計画には納得できなかったが、それでも世界のために日々研究を行うというのは自分が生きるための目的としてはあまりにも充分なものだったのだ。

暗証コードを入力し、声紋認証を行うと外へとつながる三重の扉が順に開いた。

もし何千年か何万年か後に、X-01と高度な生命体が接触したなら、どうか滅ぼされないように上手くやってくれ。

そう少しばかり未来に思いを馳せ、基地の外に出た。

